

「放課後デザイン」の考え方にもとづいた 子どもの主体性を育てる支援・環境整備に関する研究

—学童保育「ココカラ KIDS」のスタッフへのインタビューの結果から—

A Study of Supports and Environment to Develop Kids' Attitude of Independence
in After School Activities Based on Idea of "After School Design"
— Result of interview with KOKOKARA KIDS staffs—

小山 航太*
Kota KOYAMA

野村 泰朗**
Tairo NOMURA

峯村 恒平***
Kohei MINEMURA

【概要】本研究では子どもの主体性を育てることを目的とした「放課後デザイン」の考え方の提案とそれに基づいた学童保育における子どもへの支援や環境整備についての検討を行った。2017年度に学童保育「ココカラ KIDS」にて開始した「放課後デザイン」の取り組みについてスタッフへのインタビューを通してその成果と課題を明らかにした。インタビューの結果から「放課後デザイン」の取り組みを通して子どもの時間感覚や優先順位を考えると、順序立てて取り組むための判断をするというような主体的な学びの態度の成長を見ることができた。また、子どもの主体性を育てるために求められる指導者の役割や、学童保育における環境整備について今後必要となる示唆を得ることができた。

【キーワード】「放課後デザイン」、学童保育、主体性、主体的な学び

1. はじめに

1-1 新学習指導要領における「主体的な学び」

情報化社会の一つの象徴として人工知能の進展が予想されているが、一方で人工知能に対して人間の学習の強みは、感性を豊かに働かせながら、目的を設定し、必要な情報を集め、考えをまとめたり表現したり他者と協働することができることであると言われている。そのような社会変化に対して近年、日本の教育が育成を目指してきた「生きる力」の必要性がより一層強く求められるようになってきている。

2020年度からはじまる新しい学習指導要領（文部科学省，2017）では「主体的・対話的で深い学び」という表現で、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の必要が言われている。これから大きく変容していく社会において主体的に関わり、新しい社会を創造していく学習者を自ら育てることは大きなポイントになるだろう。

1-2 学童保育の登場と変遷

一方で、「教育」が行われる場は学校だけではない。本節では学童保育に着目し、増山（2015）を拝観しながら学童保育の誕生とその変遷について整理を行う。

1960年代の高度経済成長期を境にして日本の社会は農村的な生活様式から都市型的生活様式に大きく変容

した。『児童福祉白書』（厚生省児童局編，1963）で「保育に欠ける児童」が着目され、大阪の今川学園（1948）や東京都北区（1950年代）で父母たちの手による市民的な運動の中から学童保育が誕生した。1997年の児童福祉法の改正により「放課後児童健全育成事業」という名称で制度化され、10年余の歳月を要し、ようやく制度の中に位置づくこととなった。制度化を皮切りに1997年で9,074箇所あった学童保育施設は10年後の2007年には16,668箇所まで増加した。全国学童保育連絡協議会の2018年調査では学童入所児童数は前年よりも63,000人増加し、1,231,522人であったとされ、把握できている待機児童が16,957人だったと報告されている。依然として学童保育の整備は十分ではなく東京などの都市部を中心に学童の待機児童が発生している。政府の一億総活躍プランの一環として、民間をはじめ多くの学童保育施設が整備されるようになってきているが、子どもの放課後の居場所作りは保育園待機児童問題などと同様に喫緊の政策的課題であるとされる。

1-3 学童保育の役割と課題

学童保育の経緯を踏まえ、更にここでは学童保育の役割と課題についても検討していく。先に挙げた増山は、学童保育の3つの役割を、①家庭の代替機能、②放課後の学習の場、③子どもの遊び・文化活動の場、である

* 埼玉大学教育実践総合センター

** 埼玉大学教育学部

*** 目白大学 / 埼玉大学教育実践総合センター

と整理している。①では福祉としての学童保育の意味について児童福祉法の中でも指摘される「保育に欠ける子ども」の居場所としての学童保育の重要性を指摘している。②は特に実践者の中で共有されてきた教育（教育運動）としての一面である。1968年の「子ども白書」では学童保育は「学校と家庭の間を便宜的に埋めるものではなく、遊びを中心とした集団生活の中で人格形成を目指す、独自の教育の場であると認めさせること」が強調されている。小川（1972）は学童保育に「新しい教育の可能性」を見出していたと言われている。そういった中で増山がとりわけ強調するのは、③の子どもの遊び・文化活動としての学童保育である。

2002年の学校週5日制の導入以降、子どもの放課後は多忙化したと増山は指摘している。現代の子どもの放課後は過度な「学校化」「学習化」の傾向があり、そのような環境の中に押し込められることがストレスを子どもたちにもたらしめている。

また指定管理者制度を運用した民間委託や民間の学童保育の台頭により市場化が急速に進んでいる。そこでは保護者の求める「ニーズ」に応えるための「多様なサービス」としての側面が強くなっており、子どもはそのサービスの受け手・顧客としての性格を強めている。このような傾向により学童保育は子ども主体の仲間づくり、地域生活作りとは逆行する方向に進んでいると言えるだろう。

この顛末として増山は、安全管理の名の下に学童保育における子どもの言動・活動に対する許容度・寛容度が狭まる管理的対応が増えてきていることを指摘しており、「子どもの自由世界」の成立のために①自主的な時間の活用、②主体的に選択できる活動、③活動の自治的な運営が必要で、学童保育においてこの3つのポイントを達成していくために、子どもの視点を意識し、子どもたちを主人公に変え、日々の生活と遊びを通じて、子どもたちの仲間意識と自治意識を育むことにより「子ども自身の居場所」としての学童を作り上げていくことの重要性を論じている。

1-4 本研究の目的

ここまで、昨今の社会変動を受けた教育改革の動向、学童保育の経緯と、学童保育の課題についてみてきた。これらを踏まえ、本研究では、増山の指摘した学童保育の社会的な役割を吟味しつつ、社会変動を受けた今日の教育のあり方も踏まえ、学童保育のあり方とそこで子どもの主体的な学びを育てていくための考え方としての「放課後デザイン」の提案を行い、それに基づいた子ども支援、環境整備についての検討を行うことを目的とした。具体的には、民間学童保育「ココカラ KIDS」において、「放課後デザイン」の考え方に基づいた実践を実施し、スタッフへのインタビューを通じて、その成果と課題を明らかにしていく。特に本研究の立場としては、増山の指摘から、子どもの主体的な態度を育てる場としての学童保育の可能性に注目する。本

研究では学童保育において子どもの主体的に活動する態度を育てることを目的とした環境作り、支援の方法についての検討を行う。

2. 学童保育「ココカラ KIDS」での実践

2-1 学童保育「ココカラ KIDS」での実践の概要

本研究では、目的に従い学童保育での活動内容を検討し、実践を行った。その実践は、2016年からさいたま市内で運営される民間学童保育「ココカラ KIDS」にて行った。2017年4月より埼玉大学STEM教育研究センターと共同研究を開始し「子どもの主体性を育てる」ということに着目した学童保育の実現を目指している。

学童保育の運営形態はスタッフが常駐スタッフ2名（うち1名はダンス講師も兼ねる）、非常勤のダンス講師1名、ロボット・プログラミング講師4名、運営スタッフ2名の体制で行っている。毎週、月曜・水曜・金曜は「ロボみらコース」の日でロボット・プログラミング講師が中心に支援を行う。また火曜はヒップホップ、木曜はジャズの日でダンスの講師が指導を行う。それにプラスして1名のスタッフがおり、学童保育自体は、常にスタッフ2名以上の体制で運営している。

2-2 「放課後デザイン」の目的と方法

主体的な学びとは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることとされている（文部科学省、前掲）。また前節において増山が指摘するように①自主的な時間の活用、②主体的に選択できる活動、③活動の自治的な運営の3つを主体的な学びを捉えるための要素として整理していく。

「放課後デザイン」ではそのような子どもの主体的な学びやその態度を形成していくために、ココカラ KIDSでは子どもが自ら考え、自分のやりたいことに取り組むための環境整備と支援を実施した。具体的には①時間をデザインする、②活動の内容をデザインする、③活動を振り返る、という3つの要素を放課後デザインの要素と考え、それらを育成していくための取り組みを実施していった。

まず、「①時間をデザインする」は、学童保育にくるところから帰宅までの時間で、何をどのくらい時間にかけて、どの順番で行うかということ自分で考えデザインしていく、という資質・能力の育成を目指した。

「②活動の内容をデザインする」は、放課後の時間に何をするかを自分で考える、という考え方である。学童保育の基本的な機能と子どもの多様な興味に対応するための活動として、ダンス、ロボット・プログラミング、英語の歌に取り組める環境を用意した。子どもはそこから自分で何をどうやってやるかを考えて、自分なりの1日の計画を立てていく。このように活動内容を自分でデザインできるようになることを目指した。

「③活動を振り返る」では、子どもが自分で立てた計

画について、それが実際にできたかまとめ、プレゼンテーションを行うことを通して振り返り、次回以降の活動改善につなげていくための方法である。①、②、③を通じて実際に「①時間をデザインする」、「②活動の内容をデザインする」ができるようになっていくというサイクルを、実践の枠組みとして考えた。

2-3 放課後デザインの方法

上記の枠組みを実践するために、以下の方法を取り入れた。

まず、子どもは登室後に放課後デザインのプリントに今日の目標、今日一番やりたいこと、を記入しその上で、

今日の予定を15分刻みでスタンプ（活動内容が書かれたもの）を押していく。スタンプにないような活動を行う場合は、自分で記入をする。放課後デザインを変更したい場合は、その時に書き換える。

1日の最後にまとめとプレゼンテーションを行う。まとめでは、予定と比較、今日の目標の振り返り、今日のこだわり（楽しかったことやみんなに伝えたいこと）の記入、次回に向けての記入、をする。その後、1人1分程度の時間、スタッフと他の児童に向けてプレゼンテーションをし、質疑を行う。図1に示すのが、記入シートである。

放課後デザイン No. __

日付： 年 月 日
名前 _____

活動のテーマ _____

今日のもくひょう

今日一番やりたいこと

ごご

	じこく 2:00		2:30		3:00		3:30		4:00		4:30		5:00
よていの時間													
じっさいの時間													
	じこく 5:00		5:30		6:00		6:30		7:00		7:30		8:00
よていの時間			まとめ	1分間プレゼンテーション									
じっさいの時間			まとめ	1分間プレゼンテーション									

もくひょうはたっせいできたかな？ りゆう	今日のこだわり
じかいにむけて	

図1 「放課後デザイン」の記入ノート

2-4 「ココカラ KIDS」での基本的な1日の流れ

以上のような「放課後デザイン」を実施するための、子どもたちの学童保育での1日の基本的な過ごし方は表1のようになる（子どもの学校や学年によって異なる場合もある）。

表1 「放課後デザイン」の基本的流れ

15:00頃	登室
	荷物の片付けうがい・手洗い
	放課後デザイン
	放課後デザインに基づいた活動 おやつ、宿題、遊び（ドッジボールなど）、ダンスのレッスン、プログラミング・ロボットの学習、英語などから選ぶ（ない場合は自分で書く）
17:30	まとめ・振り返り
17:45	プレゼンテーション
18:00-19:00	帰宅

2-5 実際の実践の概要

本論で述べる実践は、北浦和にある民間学童保育ココカラKIDSに通う子どもたち11名を対象として行った。対象学年は年長～小学校3年生、男性8名、女性3名であった。学童保育に登室する日数は1日～5日/週であり、ややばらつきがある（表2参照）。

2-6 実践のスケジュール

2017年4月より実験的に放課後デザインを開始した。毎月行うスタッフ月次ミーティングの時間を用いてスタッフ向けの研修、意見交換を行った。なお、研修内容は、①放課後デザインの意義と目的、②放課後デザインの実現に向けて（時間をデザインすることについて考える）、③子どもの興味を中心とした活動の事例紹介（活動の内容をデザインする）、④プレゼンテーションの目的（活動を振り返る）、といった内容について行っ

表 2 本実践での対象児童

名前	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
性別	F	M	M	M	M	M	M	F	M	F	M
学年	2	1	3	1	2	2	2	3	年長	1	1
登室回数（週あたり）	5	1	1	1	1	1	1	3	1	5	1
ロボみらのみの参加		○	○	○	○	○	○	○			
ダンスのみの参加									○		○

た。研修の中で放課後デザインを行なっていく最初の段階として「時間をデザイン」するという点に焦点を当てて初年度の活動を進めていくこととした。

あくまでも「①時間をデザインする」、「②活動の内容をデザインする」、「③活動を振り返る」という要素を一貫し、必要な改善を行いながら実践を進めた。

3. 「ココカラ KIDS」スタッフへのインタビュー調査

3-1 インタビューの目的と概要

ここまで述べてきた実践について、その成果や課題を検討するため、ココカラ KIDS スタッフへのインタビューを行った。具体的には、ココカラ KIDS の常勤のスタッフ 2 名（A 氏、B 氏）を対象に半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。インタビュー調査では、特に「時間をデザインする」ということを中心に 1 年間の放課後デザインの取り組みを通して子どもたちの変化や、スタッフとしての指導の仕方について質問をした。具体的には以下の項目である。

- ・時間配分（何にどのくらい時間がかかるかという認識）について
- ・宿題をいつやるかということについて
- ・計画の立て方と実行の仕方・関連について

3-2 調査方法

先にも述べたが、A 氏、B 氏を対象とした半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。インタビューは、2018 年 10 月に実施し、一人あたり 30 分～40 分程度であった。冒頭で本調査の目的及び倫理的配慮について説明し、同意を得た上で行った。

3-3 インタビューの結果

(1) 時間配分について

まず、放課後デザインに取り組む上での時間配分について尋ねたところ A 氏、B 氏ともに放課後デザイン開始の当初はできていなかったと回答した。その原因は子どもたちが時計を読むことができなかったこと、どのくらい時間がかかるかという感覚をつかめていなかったことなどを原因として挙げた。その問題に対してスタッフは 15 分ごとにアラームを鳴らす。時計を見るように声がけをする。普段どのくらい時間がかかっているかをアドバイスしてあげるなどを行った。その結果として子どもたちはそれぞれのやることにどのくらい時間がかかるのかということが意識できるようになってきたと回答した。また B 氏はその要因として子どもたちが日々

の生活に関するルーティンを作ることができたことを挙げた。

（時間に関する話題の中で：*は研究者）

A 氏：時計を見れるようになり、少しずつ予定どおりに動ける子が出てきた。

*：予定どおりに動ける子。時間配分について？例えば。

A 氏：例えば、予定を立てる時に、何時にこれ、この宿題は私は何か苦手だ、今日、その算数苦手だから、ちょっとスタンプを多めに押しておこうみたいな。

*：なるほど。そういうその日に合わせて、うまく配分できるようになってきたという感じ。

A 氏：うん、そう。

B 氏：曜日ごとにもあるけど、あれって、たぶんその子のルーティーンがあるから、1 年ぐらいかけたら、だいたいいつも一緒だけだね、書いている時は。

(2) 宿題に対する意識

放課後デザインの中で特に課題になっていた「宿題」に対する取り組みについて尋ねた。宿題への取り組み方は開始当初は、子どもによって終わらないことや、始める時間がずれてしまうこと、予定の時間より時間がかかることも多くあったというのが放課後デザインを繰り返すに連れて、子どもたちの取り組みは変化してきたという。実態としても、子どもたちの多くは宿題を登室してから最初に取り組むようになったが、インタビューの中でもそういった変化が明らかになった。

（宿題に関する話題の中で：*は研究者）

B 氏：何か、結構自分たちはだいたいこのぐらいの宿題を出されたら、このぐらいで終わるだろうという時間とかが当たり前に、大人だから分かっていたけど、子どもって、特に 1 年生の子とか、初めて宿題をする子は結構、半年ぐらいかけなきゃ宿題の時間って自分でつかめないかなと思って。

A 氏：どうだろう、曜日によって違うけど、宿題が多いときは最初にやっている気がする、みんな。

A氏：少ないときは、何かお迎えに来るギリギリとか、プレゼンが終わった後とかにやっているかもしれない。

その日の計画を立てるのは、彼らにとっては、どんな意味がある活動なのかなというふうに思いますか。

A氏：好きな事をやるための活動。

(3) 自分で計画を立てて実施するという事について

子どもたちの放課後デザイン（計画）と実際の取り組みのズレについて質問したところ2名とも開始当初にあったズレは徐々に少なくなってきたと回答した。また効果的だった指導について、それぞれの活動が終わるごとに子どもたちにどのくらい時間がかかったかを確認させることが、有効だったという回答が得られた。時間を守ることが目的化せず、やりたいことをやるために放課後をデザインするという姿もみることができた。放課後デザインをする意味については二人とも子どもたちが自分の好きなもの・やりたいことと、やらないといけないこと（とされていること）とどう向き合うかということについて子どもたちの中に意識の変化を見ることができた回答した。

B氏：好きな事を見つけて、ここで。ここでじゃなくても、学校とかどこでもいいんだけど。自分の好きな事をするために、やっぱりやんなきゃいけない事ってあるから、好きな事をするために、他にやんなきゃいけない事を、限られた時間の中でどう組み立てていくか。

*：というのは、できるようになってきたということですか。

B氏：そうだね

(効果的な指導に関する話題の中で：*は研究者)

A氏：宿題が終わった後とか、何か終わった後に、時計を見ようみたいな、最初にやったじゃん。放課後デザインで、もともと書いてあったやつ。あれで何時に宿題が終わったかみたいなのをやったら、自分が意外と宿題早く終わっていることとかに気付いたから、そういうのをもっと。

*：何だろうね。終わったところで、意識をさせるみたいな、

A氏：そう、そうそう。

A氏：「今、何とかする時間だよ」みたいなのを、私は結構「宿題やろうよ」とか、全部言っちゃうから、何か言わないようにしようかなと思っている。

4. 考察

スタッフへのインタビュー調査から放課後デザインの取り組みを通して子どもが時間を意識し、計画を立て、それを実行していくことができるようになってきた姿を見て取ることができた。放課後デザインの取り組みを通して、何にどのくらい時間がかかるか、何をどんな順番でやるのがいいのかを判断する力が育っていると考えられる。また子どもの放課後において大きな問題となる「宿題」について子どもたちは「やらないといけないもの」という理解しており、自分のやりたいこととの間でどのように折り合いをつけて取り組むか、ある種の葛藤を抱えながらも取り組む姿があった。多くの子が最初に宿題を終わらせてしまうところから、自分のやりたいことの時間をたくさん取るための合理的な判断ができるようになってきたとも考えられる。また単に用意されたものをこなすということではなく、当初の放課後デザインの枠を越えていくような主体的な姿をみることができた。スタッフの指導として、「〇〇をきなさい。」という声掛けではなく、子どもたち自身に考えることを促す声かけや、活動の後に振り返りを通して、子どもに意識づけをする指導が行われていたことがわかった。

(自分のやりたいことに取り組むという話題の中で)

A氏：ある先生が辞めちゃう時に、「お別れ会をやりたいから、今日、放課後デザインやんなくてもいい？」みたいな。「全部準備の時間に使いたい」みたいな。「でも、宿題はちゃんとやるから」みたいな。言われたのが、すごい主体性もあるし、(ある意味)何かちゃんと放課後デザインじゃないけどさ、・・・

B氏：Aちゃんとか、すごい空いた時間に「(ダンスの)音貸して」って言って、すごいダンスとかするから、そういうのはもうご自由にやってもらいたいなと思って。

5. まとめと今後の課題

本実践で行った放課後デザインの活動を通して、子どもたちの主体的な学びにおける「毎時間見通しを立てて粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる」という力を育てることが多くの子で達成されたと考えられる。また増山の指摘の、特に3つ目に挙げられている子どもの自治活動についても学童保育で用意されたコンテンツをやるだけではなく子ども側から「やりたい」「こうしたい」という取り組みをみることができ、今後さらに子どもたちのより主体的な取り組みを期待することができるだろう。

さらに今後の課題として、そのような学びを促すための指導者の支援の方法についてさらに検討していく必

(「放課後デザイン」をする意味について：*は研究者)

*：放課後デザインの中で、子どもたちが自分で

要性があると考えられる。また子どもの「主体性」を考える際に子どもの「好きなこと」「やりたいこと」を中心にその環境や指導を構成していくことの重要性がスタッフへのインタビューから示唆された。本研究では時間をデザインするという事に焦点を当てて放課後デザインの実践について検討を行ったが、文部科学省の掲げる主体的な学びも「子どもの興味関心にもとづき」とされているように、どのように取り組むかという点ではなく“なんのために”、“なぜ”それに取り組むのかという学びの目的に焦点を当てた支援や環境整備を行っていくことが必要であると考えられる。本実践もそういった視点も含めてさらに検討を行い、充実させることを通じて、学童保育の意義や価値を考えていきたい。

【謝辞】

本実践及び調査にあたってご協力頂いたココカラKIDSの関係者の方に深く感謝申し上げます。

【引用文献】

- 文部科学省（最終検索日 2018.11.7）「新しい学習指導要領の考え方」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 増山均（2015）「学童保育と子どもの放課後」 新日本出版社．
- 全国学童保育連絡協議会（2018）「学童保育情報 2018-2019」全国学童保育連絡協議会．
- 厚生省児童局編（1963）「児童福祉白書」．
- 小川利夫（1972）「教育と福祉の権利」 勁草書房．